

2017年11月19日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 11章 19～30節

説教：キリスト者と呼ばれる

はじめに

私たちはいま、このように教会に集い、神を礼拝することができます。いまでは当たり前のことですが、実は二千年前はそうではなかった。教会にユダヤ人以外の異邦人が集うことなど、まったく想像もできなかった時代がありました。

なぜそうなったのか。出エジプト記 34章 15節にこうあったからです。「あなたはその地の住民と契約を結んではならない。かれらは神々を慕って、みだらなことをし、自分たちの神々にいけにえをささげ、あなたを招くと、あなたはそのいけにえを食べるようになる。」「その地」というのは、カナンに元々住んでいた異邦人を指します。これを根拠にしてユダヤ人は長年異邦人と交わることをかたく避けていた。教会の指導的立場にあった使徒たちも、そういう背景で育っていますから、異邦人が教会に集うことなどありえないと思いついていました。

それがあるときから、ユダヤ人だけではなく異邦人も教会に集って良いことになる。いままでこうだと思いついてきたことが、百八十度ひっくり返るわけですから、当然混乱のようなことが起きた。いったいどんなことが起きたのか。そこにどのように神が働いておられたのか。今日の箇所から見ていきます

## 1 ステパノの迫害によって

### 1) 散らされた人々

イエス・キリストが墓の穴からよみがえられ、四十日の間、弟子たちにそのよみがえり

の姿を見せてくださった後、天に上げられるとき、弟子たちにこう語りました。「ヨハネは水でバプテスマを受けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受ける。」そのみことばのとおり、ちょうど一週間経った五旬節(ペンテコステ)と呼ばれる日、天から大きな音とともに聖霊が降り、それをきっかけにして大ぜいの人たちが救われ、エルサレムに最初のキリストの教会が建てられました。

このようにして教会はスタートした。しかしそれからが大変でした。大祭司や長老たちは、多くの人たちが次々に改宗して教会へくを見て危機感を感じる。それで活動を妨害する。しかし教会はひるまず、ますます熱心に伝道活動を行い、教会に人が集まるようになる。あまりにも人が増えて、使徒たちだけで全体を管理することが難しくなったので、信仰と聖霊とに満ちていた何人かを選び、奉仕を分担することにしました。

その選ばれた中のひとりがステパノです。彼は、外に出て行ってギリシャ語を話すユダヤ人を対象にして宣教活動を行います。かねてから教会に対して敵意を持っていた人たちは、ステパノが語ることばの揚げ足を取り、「律法に逆らうことばを教えている」という罪で逮捕し、裁判にかけてしまいます。ステパノは裁判の席で旧約聖書を開き、まっすぐに主イエスこそ救い主であることを証し、あなたがたは、この正しい方であるイエスを十字架で殺し、あなたがたこそ律法を破っているのだ、とはっきりと証言しました。これ

を聞いて人々は大声で叫びながらステパノを外に連れ出し、石で打ち殺してしまいます。これをきっかけにしてエルサレムの教会への迫害が激しくなっていきます。クリスチャンと見れば次々と逮捕して牢に投げ込み、差別やいやがらせ、脅迫を繰り返します。とうとうエルサレムにいられなくなる。

その事情を述べているのが、11章19節です「ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかつた。」

いまで言えば難民になってしまうわけです。向かった先は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケとあります。いったいどこあたりなのか。週報に地図を載せましたので確認してください。

## 2) ユダヤ人とギリシャ人

そこには、ギリシャ語を話す外国人が沢山いるわけですが、現地に長く生活しているユダヤ人たちもいた。逃れた人たちは、ユダヤ人たちにだけみことばを語ります。理由は二つある。一つは現実的な問題で、ことばの壁があったから。エルサレムから逃れてきた人たちはギリシャ語を自由にしゃべることができない。それからもう一つは宗教的な理由。先ほど述べたとおりです。ユダヤ人と異邦人はつきあいをしてはならないとかたく教えられていたから。教えをかたく守ろうとしたわけです。

## 2 バルナバの派遣

### 1) キプロス出身のユダヤ人

しかし話はここで終わらない。20節。「と

ころが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシャ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。」

キプロス人とクレネ人とは何者か。地図にあるキプロス島生まれのユダヤ人のことであり、北アフリカのいまのリビアにあたる地域に住んでいたユダヤ人のことです。ユダヤ人ではあるけれど、本国からはずっと離れて生活していた人たちです。異邦人とつきあってはならない、と言われても、そもそも異邦人とつきあわなければ生活ができない。当然ギリシャ語もしゃべることができる。ユダヤ人であるとか、異邦人であるとかこだわりがあまりありません。それでごく自然にギリシャ人にも主イエスのことを宣べ伝えた、ということでしょう。その結果、大ぜいの人が信じて主に立ち返りました。アンテオケの教会にはユダヤ人ばかりではない、異邦人も集うようになります。

### 2) 神の恵みを見る

さてエルサレムの教会はどうしたか。前にも述べたとおりユダヤ人と異邦人が同じ部屋に入るなど絶対あつてはいけないと思つてます。ところが、アンテオケ教会ではいっしょに礼拝をしていると聞いたわけですから、腰を抜かすほど驚いた。それで早速調査団を派遣することになった。調査団のリーダーに選ばれたのがバルナバです。そもそもバルナバとは何者であるのか。4章36節で紹介されています。「キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフ。」

これを読むと、バルナバは少なくとも二つの理由で選ばれたことがわかる。この問題は

キプロス生まれのユダヤ人が伝道したことで起きました。キプロス生まれのバルナバならば、同じ故郷ですから話を聞きやすい。もう一つの理由は、彼は使徒たちから「慰めの子」と呼ばれるほど、教会の中で信頼されていたことです。レビ人でもありましたから、律法にも明るい。適任でした。

このようにしてエルサレム教会から派遣されたバルナバは、アンテオケに向かいます。そこで彼は何を見たのか。関係者から事情を聞き、実際に主に立ち返ったと言われている人たちにも会って確認をし、どのような交わりをいしているのか、つぶさに観察をした。その結果、バルナバは迷うことなく結論を出して、エルサレムに報告しました。このことはすべて主の御手によるものである。なぜ主の御手によると分かったか。そこに神の恵みがあったからだと書いてあります。では、神の恵みとは何か。大ぜいの人が教会に集まって主を賛美していたことか。もちろんそれも一つでしょう。でももっと核心部分をバルナバは見て、ここに神の恵みがあると書いています。いったい何を見たのか。そのことを次に考えていきます。

### 3 キリスト者

26 節に、「弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった」とあります。私たちもよく「クリスチャン」と言っていますが、これが語源です。教会の仲間同士で言いだしたのではなく、教会の外の人たちがキリストを信じている人たちを見て「クリスチャン」とあだ名をつけた。それがそもそもの始まりでした。

では、いったいクリスチャンとは何でしょう。もちろんイエス・キリストを救い主であ

ると信じている人たちのことですが、もう少し詳しく確認しましょう。アンテオケの人たちはそもそも何を聞いて信じたのか。聖書には、「みことば」とか「主イエスのこと」とあります。「主イエスのこと」とは何か。実は使徒の働きをずっと貫いているテーマです。そのテーマはペンテコステの日に始まります。人々に聖霊が降った時、集まって来た人にペテロが語ったことばがそれです。一言でまとめるなら 2 章 36 節です。「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、いまや主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」これを聞いた人たちは心を刺され、「私たちはどうしたらよいでしょうか」と尋ねました。ペテロは答えます。「悔い改めなさい。そして、罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。」

かつて私は信仰を持つ前のことですが、クリスチャンと聞くと、非常に恵まれた生活をしていて教育レベルも高い人たちが信じている宗教。田舎者にはまぶしくてとても近づけない人たち、遠い存在。そんなふう思っていて、クリスチャンが何者であるのかよくわからなかった。

でも、あたりまえのことですが、聖書にはクリスチャンの定義がちゃんと書いてある。「あなたは、主イエスを十字架につけた罪人である」と聞いたとき、心を痛めて、「私たちはどうしたらよいでしょうか」とうろたえる者。罪を赦していただかなければ、生きていくことはできないと、心の底から嘆いたことのある人たち。それがクリスチャンだと言っている。主が差し出してくださった、救

いの御手にすがりつくようにして、バプテスマを受けた。それがクリスチャン。

バルナバはアンテオケで神の恵みを見て喜びました。自分は神に対して取り返しのできないほどの大きな罪を犯してきた。そのことを知って心を刺された人たちがいました。自分のしてきたことを心から悔いて、主の赦しを受けた人たちが、大きく変えられ、救いの喜びを体験している人たちがそこにいました。それが神の恵みだったのです。

神の恵みは、教会の外の人たちの目にも見えるようになっていきます。この人たちは普通ではない。キリストを信じる人たち。クリスチャンである。そのように呼ばれるほどに、神の恵みは人々に衝撃を与えていくのです。

このアンテオケ教会は、やがて大飢饉のときにエルサレムに救援物資を送ります。神の恵みは、独り占めではない。外へ外へと自然にあふれ出ていきます。なぜ彼らはそんなことができたのか。がんばらなければ、と思ったからか。いやそうではない。私は神を十字架にかけた罪人なのだ。そんな私のためにさえ、主はいのちを捨てて、私を愛し、救ってくださいだったのだ。その喜びがあるところに、いのちの水はあふれるように湧き出て、外に広がっていきます。

21 節に「主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返った」とあります。主がすべてを成し遂げてくださる。もう一度このことを覚えたいと願います。